

132 能面 (2022年10月13日)

前回、能舞台をご紹介した際に、能は仮面劇であることをご説明しました (*)。シテと呼ばれる能の主人公を演じるシテ方は、能面を着けて演じます。今回は、能面についてお話しします。

古代から世界各地で様々な仮面が作られてきました。仮面には、顔を隠して他人に分からないようにする仮装用のものや、宗教的な儀式で使うものもあります。能面は、宗教的な儀式で使われるものではありませんが、単に顔を隠すだけでなく、役者が装着する仮面がかたどっているものになりきる力を与えるものだと言われています。

能面は、200種類以上存在しますが、よく使われるものは約60種です。大きく分けて、翁（「翁」という曲のみで使われる面）、尉（じょう）（老人）、女面、男面、鬼神、怨霊という6種類の面があります。能面の起源は必ずしも明らかになっていませんが、伎楽という仮面



masque de Gigaku (7e-8e) /伎楽面, 7-8世紀
出典 : ColBase (<https://colbase.nich.go.jp/>)

を着けて演じられた無言の舞踏劇

が、7世紀頃に中国から日本へもたらされたとする記録が残されています。伎楽で使われた面は、能面の起源の一つになったと考えられています。

能と狂言という二つの芸能を合わせて、能楽と言います。能楽は、8世紀頃に中国から伝えられた多様な芸能から発展したと考えられています。世阿弥（1363?-1443?）が、これらの芸能を芸術性の高い能に大成しました。世阿弥が追求したのは、幽玄な美です。「幽玄」とは、説明することが難しい表現ですが、物事の趣が奥深くはかり知れないこと、高尚で優美なことを言います。能が面を着けて演じられる舞台劇として発展した背景には、能が幽玄な美しさを



okina/翁 vieil homme/尉
出典 : ColBase (<https://colbase.nich.go.jp/>)



femme/女 homme/男
出典 : ColBase (<https://colbase.nich.go.jp/>)



démon/鬼神 esprit/怨霊
出典 : ColBase (<https://colbase.nich.go.jp/>)

パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本

表現する演劇であり、顔の表情の変化を隠すことが求められたこともあると考えられています。能面は、能の幽玄な美を追求するために欠かせないものなのです。

能楽は、幕府や藩が保護していました。しかし、幕藩体制が崩壊して1868年に明治政府が発足し、後ろ盾を失った能楽界は大きな打撃を受けました。国内では能面の需要が減った一方で、日本国外では能面が美術品として高く評価され、多くの能面が日本から国外へ流出しました。現在では、欧米で能面を所蔵する美術館があり、パリでは、ギメ東洋美術館で能面を観ることができます。能面を観る機会があれば、美術品としての美しさだけでなく、能面が作り出す能の世界を想像しながらご覧になってください。

* 131 能舞台

<https://www.fr.emb-japan.go.jp/files/100402208.pdf>